

オピニオン

希望のアフガン広島研修



UNITAR特別顧問
ナスリーン・アジミ

59年イラン生まれ。17歳の時にスイスへ移住。86年ジュネーブの国際問題研究所で国際関係学修士号を取得し、88年からジュネーブのUNITAR本部に勤務。ニューヨーク事務所長などを歴任し、2003～09年、初代の広島事務所長を務めた。広島市中区在住。

先日、私は大好きな画家でシルクロードの案内人でもある平山郁夫の展覧会を鑑賞した。何度もアフガニスタンを訪問した彼は1968年、バミヤン渓谷の洞穴に6世紀から存在する荘重な大石仏を描いた。が、その石仏は2001年、タリバン政権によって破壊された。展示された立像の石仏と、破壊後の空洞を描いた作品には、古代から続くアフガニスタンの大地に、ここ数十年の歴史がもたらしたすべての苦難がにじみ出ているように見える。

その国で4月初め、人々が暴力の脅威に屈することなく、大統領選挙と地方議会選挙が実施された。今も開票が続くが、選挙での不正行為や暴力の懸念がなくなったわけではない。しかし、3人の有力大統領候補は、医師や学者としてそれぞれ業績を残している。希望が持てる。

日本には、アフガニスタンの平和的な政治転換を願う多くの理由がある。米国に次ぐ2番目の支援国家であり、02

復興のリーダー役いでよ

年以來、約50億ドルの開発援助を行ってきた。国土は日本のほぼ2倍。人口は4分の1だが、25歳以下が65%を占める。日本の投資と専門性は、インフラ整備、農業、鉱業、保健衛生、教育などすべての分野で役立つだろう。

さらに重要なことは、アフガニスタンの人々が、日本を大変称賛していることだ。彼らは日本を、政治的にも文化的にも、欧米のほとんどの同盟国よりもはるかに好意的に見ている。

私にとつての関わりは、広島県の支援を得て国連訓練調査研究所(ユニタール)が03年から実施している人材育成事業の取り組みである。

広島事務所開設に当たって私たちは、被爆地広島からアフガニスタンのために何ができるかを探るため現地を訪ね、政治家や学者ら多くの人々の意見を聞いた。必要なのは、相手国の現実に即した、柔軟な施策である。

そこから生まれた事業が、国の中核を担う政府関係者を対象に、1年間のサイクルで指導者研修を行う「アフガニスタンのための広島研修」であった。核となる研修には、プロジェクトの考案と管理、報告書作成と資金集め、経理と予算編成、チームやネットワークづくりまで含まれる。

すべてのチームには、アフガニスタン内外の熱心なボランティアの助言者たちが付いた。国を構成するハザラ人、パシュトゥーン人、タジク人、老若男女が一緒に働くことが義務づけられる。どのサイクルも、広島での最終ワークショップと会議で締めくくられる。

特筆すべきは、被爆地としての広島がもつ象徴的な意義である。私は、世界平和や核兵器廃絶を願う広島の道徳的立場や、廃虚から復興した街並みに、アフガニスタン人ほど影響を受けているグループを見たことがない。

原爆資料館の見学後や被爆者の証言を聞いた後で、彼らがよく口にする言葉がある。「もし広島が復興できたのなら、アフガニスタンだってできる」と。憎しみよりも復興を優先し、「許しても忘れな

い」という広島市民の努力と精神は、過去の憎しみに長くとらわれた国にとつて、計り知れない意味を有しているのである。

多国籍から成るユニタールのスタッフはもちろん、世界各地からボランティアで参加してくれる多くの講師たちの協力を得て、これまでに約450人の中核となる政府関係者が研修を終えた。彼らは厳しい状況下で、粘り強く社会の再建に立ち向かっている。広島研修で希望を見いだした彼らこそ、自国を変革するリーダー役を果たしてくれるに違いない。

平山画伯と同じように、私たちの多くは、長年にわたり違ったアフガニスタンの可能性を見ようとしてきた。豊かな文化的遺産にふさわしい平和と繁栄の地として。やがて平和が訪れたとき、私たちは研修生らとともに、かの地に平和の庭園を築きたいと願っている。そして、その庭園の中心には、広島原爆投下を生き延びた被爆樹木たちが育っているのである。

13 May 2014, Chugoku Shimbun
Ms. Nassrine Azimi, Senior Advisor of
UNITAR Hiroshima Office, talks about the
Fellowship for Afghanistan.

